

さいたま蕎麦打ち倶楽部

第1回海外そば事情視察

韓国 「孝石文化祭（そばまつり）」訪問

そば切りは日本の伝統食文化として発展してまいりましたが、“そば”を栽培し食用として利用しているのは、ヨーロッパをはじめ、アジアなど多くの国があります。

手打ちそばを通じて人の輪（和）を広げるアマチュアそば打ち集団のさいたま蕎麦打ち倶楽部は、そばの食文化を広く学習することにより、手打ちそばに対する理解を深め、手打ちそばの健全なる発展に寄与するために、海外そば産地の視察及び現地のそば関係者との交流を深めるものです。

韓国訪問のキッカケは、利賀そば研究会の田中幹夫氏との縁で、韓国と日本の文化交流で活躍している朱榮浩氏との出会いから実現したもので、正しく“そばは人を繋げる”魅力があります。

今回訪問する、韓国の平昌（ピョンチャン）郡 蓬坪面（ボンパンメン）は、韓国の著名な現代文学作家 李孝石（イ・ヒョソク、1907～1942）の出生地であり、その出生地を舞台にした短編小説「蕎麦の花の咲く頃」（1936年）は名作として知られています。そば祭りは、その小説の舞台となったそば畑を中心に開催するもので、「孝石文化祭」として李孝石の文学的精神を継承・発展させるための祭典で、今年で8回目となりますが、今や韓国予備10大祭りの一つに数えられるほどの人気だそうです。（この文化祭は10日間開催するのですが、私たちが伺った3日間だけで21万人の来場者があったそうです。）



9月9日（土）李孝石文化祭会場周辺のそば畑にて



9月8日(金)
 さいたま蕎麦打ち倶楽部会員一行は JAL951 便で成田から韓国インチョン空港へ旅立ちます。



インチョン空港では、髭も一段と遅しくなった朱榮浩さんが迎えに来ていただき、半年ぶりの再会を喜び合い、用意していただいた小型バスに乗り、いざ、蓬坪面へ！！



空港から高速道路をソウル市の漢江沿いに走りぬけながら途中のS・Aで休み、韓国のお菓子等を楽しむ。



まずは、明日から始まる李孝石文化祭の会場を訪問しました。
 会場は、テントが張られ、各ブースは明日の準備で忙しそうでした。
 朱さんから、祭りの実行委員会 事務局 長金成基さん、運営副委員長 李秉烈さんをご紹介いただきました。



会場見学後、今日の宿泊先、ハーブナラへ向かい、数々の地元料理に舌鼓をしました。



ハーブ酒などで満足した後は、別席でハーブ茶を堪能しました。



9月9日(土)

翌日は、生憎の雨でしたが、園長の李鎬淳さん自らハーブ園を案内していただきました。

李さんからは、「結婚したとき、50歳まで一生懸命働き、それを過ぎたら田舎で農園でもやりながら静に暮らしたい。」と奥さんに約束したそうで、それを実行するために学生時代、李孝石の「蕎麦の花の咲く頃」を読んで何度か訪れているこの地を選んで開園したことなどを伺いました。



7月の集中豪雨で、ほぼ全滅状態になったお花畑を家族や従業員が必死で回復に取り組んで、ようやくなんとかお客様を呼べるようになったそうです。

ここは、ハーブを中心に季節の草花を園内に配置して、年間を通して楽しめる工夫がしてあるそうです。

山荘風の宿泊施設も完備されており、年間の来場者は50万人を超えると伺いました。



園内には野外ステージもあり、また、ハーブに関する博物館など見所は多彩で、建物の設計や展示などのレイアウトやデザインは、李さんとお嬢さんだそうです。

ハーブ園の詳細は下記URL

<http://www.herbnara.com/>



ハーブ園を出発し、文化祭会場の李孝石文学館に到着するころは雨も上がってきました。

文学館入り口の李孝石碑です。



文学館は多くの来場者で一杯でした。一室では代表作の「蕎麦の花の咲く頃」の映画を上映していました。



館内は李孝石の生い立ちや、遺品などが豊富に並べられて、早稲田大学文学部で勉強しているときの写真などもありました。また、一角には世界の蕎麦料理の紹介しているコーナーもあり、もちろん日本そばもありました。



文学館からそば畑へ移動すると、その入り口には、小説に出てくる「水車小屋」がありました。



さて、文化祭会場の周り是一片に白い蕎麦の花が咲き乱れていました。そば畑の中に人が入れるように通路が設けてあり、来場者はそばの花に埋もれた記念写真を撮影するなど賑わっています。



さて、昨日下見で訪れたメイン会場は多くの人で賑わっており、あちこちで郷土芸能などが披露されていました。



一行は、早速、お目当ての蕎麦料理を味わいます。



これが、祭り会場の人気料理「そばブチム」です。
キムチなど地元野菜の漬物をそばクレープで包んだもので、なかなかの味です。



これは、いわゆる「そばチジミ」そばクレープに野菜を載せて焼いたもので、塩味だけのシンプルさがなんとも美味しく感じます。



日本でも韓国料理のお店で食べられる「冷麺」も人気です。
日本での冷麺は通常そば粉は入っていませんが、ここではそば粉入りです。
写真は、蕎麦玉を機械の圧力で細麺に押し出したものが直接茹で釜に入る仕掛けのものです。



これも、ご存知の「ビビンバ」ですが、鍋ごと出てくる豪快さがなんとも嬉しいですね。



イベントひろばでは、韓国伝統芸能などが順次披露されています。
これは、地元小学生のオープニングセレモニーで、子供たちの真剣さが伝わってきます。



そして、私たち一行にとって嬉しかったのは、郡長(選挙で選ばれる県知事のような首長)から「この祭りに、日本から16名の蕎麦愛好者団体が視察にお出でいただいています。」と会場で紹介いただき、私たち立席して応え、大きな歓迎の拍手をいただきました。



9月10日(日)

昨夜泊まったフェニックスパーク・コンドの前にあるレストランで、朝食をいただきます。ホンダラの干物でとったあっさりした出汁のスープがなんともいえない美味しさです。



今日は朱榮浩さんと友人の尹文淑さんの車2台で近隣の観光です。

まずは、今一番蕎麦の花が美しく咲いている畑を見学しました。

真っ白い花が朝日に輝いています。



五台山国立公園の一角にある名刹「月精寺」を訪問し、国宝の塔等を見学し、韓国寺院の歴史の深さを学びました。



さて、高尚な文化財見学もさることながら、やはり、楽しみは食事です。

朱榮浩さんが自信を持って紹介する本場地元料理の食堂で、ご覧のとおり珍しくどれも美味しい料理に一同大はしゃぎでした。



観光から帰って、夜の蕎麦祭り会場へ繰り出しました。

水車小屋で実際にそばを製粉している行程を見学しましたが、杵つきで、粉は大粗挽きですので、手打ちそばには向かないかな？



さて、韓国最後の晩は、昨日紹介いただいた方を交えての交流会です。

全洙元という蓬坪面そば麵お店会会長さんのお店で、蕎麦料理を満喫しながら和気藹々の懇談となりました。

左はハーブ園長の李鎬淳さん、中央が昨日お会いした運営副委員長 李秉烈さんで、右が会員の鈴木光庵さん。



今日のお酒はこのお店特製です。
どぶろくのような感じですが、アルコール度も強くない味深い酒でした。



この店のご主人全洙元さんとすっかり意気投合した飯田さん。



女性陣は、本日、観光でご案内をいただいた奚琴(ヘグム)演奏者で国立国楽院正楽演奏団首席を努める尹文淑さんとすっかり仲良しになりました。



懇談では、孝石文化祭の歴史などをお伺いし、そばの花の咲く頃に文化祭を計画する意味や、ここまで発展継続してきた苦労など貴重なお話を伺うことができました。
数々の珍しい地元料理やそば粉10割の冷麺を味わいます。



倶楽部の皆さんも韓国最後の夜を満喫しています。



全洙元さんのお店の前で記念撮影です。屋根の上には、小説「そばの花の咲く頃」のお月様と同じく白く輝いていました。
そして、この文化祭で私たちが日本の手打ちそばを披露することができるかをお互いに検討することを約束しました。



9月11日(月)

今日は帰国です。

フェニックスパーク・コンドからの風景です。

正面が朝食をとるレストラン。



帰国を前に、フェニックスパーク・コンド前で記念撮影です。

その後、再び往路を戻り、インチョン空港で朱榮浩さんと再会を約束して別れ、全員、無事に帰国となりました。

朱榮浩さん、ありがとうございました。

尹文淑さん、特に女性陣がお世話になりました。

ハーブ園の李鎬淳さん、運営副委員長李秉烈さん、全洙元さん、本当にお世話になりました。